

## 第25回岐阜外科集談会

昭和38年6月19日 岐阜医大講堂

### 1) §フローセンに依る麻酔経験

岐阜市民病院外科

島田 脩・米谷 渌・安江幸洋

呼吸器科

近石 登・葛西正美・○山田稲好

私達の病院に於いて本年1月より5月迄94例のフローセンに依る麻酔を経験したので以下その知見を述べてみたい。

症例は各科の手術に実施されたもので導入挿管はフローセン、フローセンサクシン、ペントサルサクシンで、私達は好んでペントサルサクシンを用いた。維持はフローセン、笑気+フローセンで維持困難の例は殆んどなかった。

小児麻酔帝王切開術も実施したが酔麻中、大した障害はなく、非爆発性導入覚醒の速かさ、非刺激性などの理由から私達の病院の麻酔医はエーテル麻酔を敬遠し、フローセン麻酔を好んで実施している。

### 2) 拡張型僧帽弁狭窄切開刀の使用経験について

国立療養所日野荘

○小松君美・外村聖一

井上律子・山本博昭

最近、心臓外科領域の進歩は目覚ましいものがあり、殊に、僧帽弁狭窄症に対する交連切開術は、切開刀の改良と相俟つて盛に行なわれるようになっていく。交連切開術の手術成績が、弁口の開大を充分に行なつたかいなかにかかっている点から、切開刀に関する検討が積み重ねられてきた。

今回、我々は、弁口を充分に拡大する目的で、柳原によつて考案された拡張型僧帽弁狭窄切開刀を使用し、2例に交連切開術を行なつたところ、満足すべき結果が得られたので報告する。

### 3) 人工心肺使用による開心術の経験

日野 荘

山本博昭・小林君美

外村聖一・井上律子

岐阜医大第2外科

佐 藤 収

最近の心臓外科領域では人工心肺使用による直視下手術が盛に行なわれるようになり、本邦においてもその進歩にはめざましいものがある。今回我々も肺動脈弁狭窄症例に対して人工心肺使用下に手術を行ない、良結果をうることが出来たので報告する。

症例は22才の男子、22分間の完全体外循環のもとに右室壁から肺動脈弁論にかけて約8cm切開し、弁を三弁に切開した。次に心室壁から肺動脈壁に及ぶ切開部位にテフロンパッチをあて円錐部、弁輪を拡大した。術後収縮期雑音がなお残っているが性状はやわらかくなつており、血液変化は術後1週間ではほぼ術前に復帰している。

### 4) 悪性甲状腺腫を伴なつた頸縦隔リンパ嚢腫の一例

岐阜医大第一外科

渡 辺 祥

59才の主婦、20数年前より左鎖骨上窩に腫脹を来たし、10年前に部分切除を受けた。その後穿刺排液を続けたが、最近呼吸困難、嚔声を来す。体格やや大、肥満し、左鎖骨上窩に手術痕あり、軽度に腫脹し深部に波動を認める。穿刺液はやや血性混濁、蛋白量4.0%、比重1030、造影すると気管、食道、大動脈及び無名静脈の圧迫像及び上部に陰影欠損を認める。基礎代謝率+9%。挿管全麻の下に嚢腫腔を開き、内皮の大部分を除去し、残存腔よりナイロン糸にて貯溜液を皮下に誘導する。内腔上部の陰影欠損部に一致して拇指頭大の腫瘤が突出し、これは甲状腺組織で甲状腺左葉、内頸静脈、周囲リンパ腺と一塊となる。悪性像を認め甲状腺左葉切除リンパ腺清掃を行なう。術後3週間にて異常を認めない。

### 5) 骨巨細胞腫の1例

岐阜医大第二外科

国 枝 篤 郎

症例。53才♂、主訴、左腓骨小頭部の腫脹及び疼痛。現病歴、約10ヵ月前から左下肢の鈍痛に気づき、種々の治療をうけたが軽快せず6ヵ月位前から左腓骨小頭部の腫脹に気づき次第に増大し、歩行に際して疼痛は増強した。レ線検査の結果左腓骨小頭部が著明に

膨隆した透明巣を認め、骨皮質は極めて菲薄となり1部骨皮質の破壊を認め、肋骨健康部も含めて腫瘍の全剔出を行なった。腫瘍は手拳大で比較的良好に被膜を被り、組織学的には Jaffe の分類の I 型に属す、巨細胞の数は多く、その大きさも大型で核の数も 10~100 個を算した。術後肋骨神経不全麻痺が認められた。巨細胞腫はその悪性度、発生並びに成因に関して今は論議が行なわれているが、若干の文献的考察を加えて報告した。

#### 6) Plasmocytom の一手術治験例

岐阜医大第2外科

上 田 茂 夫

手術及び放射線照射療法にて術後6年半現在尚生存中である孤立性 Plasmocytom の1例を経験した。症例、40才、男子、左後頭部激痛、38℃前後の発熱、嘔吐、左聴力障害、左耳介後部レ超指頭大圧痛ある腫瘤をふれた。手術：左耳介後部から後頭部に及び皮膚と硬脳膜の間に超手拳大の被膜に包まれた軟い腫瘤を認め略々全剔した。同部の骨は殆んど完全に破壊され腫瘤組織で置換されていた。組織学的所見：Plasmocytom。術後全身の骨のX線検査を行なったが異常所見なく、くり返しての検血、検尿、骨髓穿刺像でも軽度の貧血を認めるのみで、Bence-Jones 蛋白体陰性、正常骨髓像で形質細胞 2.6~3.8% であつた。術後左顔面神経不全麻痺を残すのみで、健康に日常生活を営んでいる。

#### 7) 特発性食道拡張の手術例

岐阜医大第一外科

渡 辺 裕

岐阜市立病院外科

○後 藤 明 彦

24才の男で2年前より、食事に際し、食物の逆流を来とし、X線検査により食道は拡張し、下端は横隔膜の高さで狭少となり、漏斗状を呈し、造影剤は投与直後より少量づつ胃に移行した。アドレナリン、アトロピン、ブスコパンの投与により造影剤の通過は促進された。これに対し Heller 手術の Zanijer 変法を実施した。手術時、食道下部には狭窄を認めず、横隔膜裂孔部にて呼吸運動に一致して強い狭窄を認めた。そこで食道下部より噴門部前面に約5種の筋層縦切開を加え、更に横隔膜脚部に一部切開を加え、示指が十分に通過しう程度に拡張した。術後20日で、術前の食物

の逆流、停滞感は全く認めなくなつた。病因として自律神経系の失調を強調し、Heller 手術法の利点につき述べた。

#### 8) 噴門癌變の二治験例

岐阜医大第二外科

国枝篤郎・松岡俊彦

症例 I. 8才の女。主訴：嘔吐、現病歴は昨年5月頃より夕食後7時間位して突然嘔吐を来すようになり、嘔吐は1週間に1回の割合で続き11月頃より痰の喀出が多くなつた。レ線検査の結果噴門部が紡錘状となり気管支拡張を認めた。手術所見では噴門部には異常は認めず、Heller の手術を行ない術後経過良好で痰の喀出も消失した。

症例 II. 55才の男。主訴：嘔吐及び心窩部の狭窄感、現病歴は7~8年前より食後時々嘔吐があり、最近食後直ちに嘔吐する様になり又、心窩部の狭窄感を来す様になつた。レ線検査で噴門部に陰影欠損を認めた。手術所見は噴門部に異常はなく幽門部癌變が認められ胃切除、Billroth I 法及び噴門部に Heller の手術を行なった。術後経過は良好である。

#### 9) 若年者胃癌の症例

岐阜医大第1外科

遠 渡 正 夫

最近われわれは過去10年間の教室の胃癌の統計的觀察を試みつつあり、28才9ヵ月の女子、21才3ヵ月、23才6ヵ月、25才8ヵ月いづれで男子の所謂若年者胃癌を得た。最近も28才3ヵ月女子の胃癌を経験したので、これら5例のついて若干の考察を加えた。

#### 10) 胃癌穿孔の一例

岐阜市民病院外科

米 谷 淳・○安江幸洋

患者は58才男子、職業は農業、主訴、心窩部の激痛、既往歴、約7~8年前より時々心窩部痛、胸やけ、嘔吐等あり胃潰瘍の診断にて治療を受けた。現病歴、突然誘因なく上腹部の激痛、嘔吐を来す。来院時、栄養稍悪く、顔面蒼白、苦悶状、舌には高度舌苔を認む。体温38.6℃、脈膊120整で白血球、12,000、腹部は全体に中等度硬満、上腹部は板状硬で圧痛著明、腫瘤を触知せず、胃潰瘍穿孔の診断にて穿孔後約5時間でフローセン全麻にて開腹(腹腔に食物残渣を混じた腹水あり胃体部前壁、小彎側よりに鶏卵大弾性

硬の腫瘤あり 其の潰瘍底に大豆大穿孔を認めた。胃  
亜全剝術を行ない前結腸に胃空腸吻合を行なつた。組  
織学的には腺癌で抗癌剤等投与し、5ヵ月後の現在健  
康である。

# 11) 術後胆道大出血を來した多発性肝内 胆石症の剖検例

本會川病院外科

渡辺 克・太田 博造

一般に肝内胆石症は比較的少ないと言われているが  
詳細に観察すれば可成の頻度に存在する事が諸家の自  
験例に基づいて報告されている。我々は最近22才の女  
子で左右両葉に広汎性に多数の肝内胆石症を認め、2  
度に亘る手術の甲斐なく、肝膿瘍と胆道大出血を來た  
し、最後には汎発性腹膜炎を併発し死亡した剖検例に  
つき報告し若干の考察を加えてみた。

# 12) 回腸に発生した Hodgkin 氏病の 1 例

岐阜医科大学第 1 外科

和 田 英

腸管の malignant lymphoma は頸部、縦隔、皮膚あ  
るいはその他の部位のリンパ組織に発生するものに比  
較して稀である。我々は最近60才男子の回腸末端部の  
腫瘤を切除し、その組織学的検査により Hodgkin 氏  
病と決定した 1 例を経験し、腸管の malignant lym-  
phoma について若干の文献的考察を加えた。

# 14) かなり大きな膀胱結石の 2 例

岐阜県立岐阜病院泌尿器科

石山勝蔵・足立 一郎

外科 伊 藤 鉦 二

第 1 例. 17才の紡績工場女工.

49×35×24mm, 31.1g. 主成分磷酸塩

第 2 例. 16才の女子高校生

48×39×25mm, 32.5g. 主成分尿酸塩

共に膀胱高位切開にて剔出。術後の経過順調。

以上 2 例を報告し、併せて、当科開設以来 3 年半の  
間に行なつた膀胱結石の治療の統計を述べた。

追加)

岐阜医大泌尿器科

木 村 泰 治 郎

症例 I. 4 才男児. 1 年前より頻尿, 排尿困難, 時  
に尿線の中絶あり, レ線写真で膀胱部に 4 個の結石陰  
影を認める。膀胱高位切開にて 6.5g, 5.1g, 5.1g, 6.5g  
の 4 個の結石を剔出する。

症例 II. 14 才女児. 半年前より下腹部の鈍痛, 排尿  
痛あり, レ線写真で膀胱部に鶏卵大の結石陰影を認め  
る。まだ手術前である。

以上の 2 症例を追加し、小児の膀胱結石につき若干  
の知見を述べた。

# 15) 昭和37年度(1962)における岐阜医 大泌尿器科の臨床統計的觀察

岐医大泌尿器科

後 藤 薫・篠田 孝・尾関信彦

伊 藤 鉦 二・阿野貞夫・磯貝和俊

木村泰治郎・木村英道・足立 一郎

西 守 哉

岐阜医大泌尿科の昭和37年度(1962)における外来  
患者, 入院患者, 手術術式, 及び諸検査等の臨床統計  
的觀察をのべた。